

対話と予定調和の分岐点

—『Android Opera Mirror』—鑑賞者による報告—

間瀬 幸江

はじめに

2020年春と2023年春の二度にわたり、教育現場において主体的な学修をめぐる議論が先鋭化した。2020年は感染症拡大予防のために対面授業を回避し遠隔授業を急ごしらえで導入した年であり、2023年は、2022年秋の OpenAI による ChatGPT 発表後最初の新学期である。

いずれの場合も、現場にとっての最大の懸案は、教育の質保証であった。現実の教室空間の共有を前提としてきた授業という営みは、教室の代わりに情報技術 IT を用いた枠組みで実施されてなお、従来の「質」を維持されねばならないこと¹。「主体的な学び」にとって、学習者の手の届くところに ChatGPT が存在するがために起こりうる弊害には、授業担当者は危機感を持たねばならないこと。いずれも、機械を「脅威」とみなす姿勢である。

2023年4月、パリのシャトレ座で6月に舞台作品『Android Opera Mirror』²が上演されることを知った。音楽家の渋谷慶一郎による音楽作品で、舞台の中心に据えられるのは「オルタ4」と呼ばれるアンドロイドである。オルタ4には ChatGPT が搭載されている。教育業界のみならずあらゆる領域で AI に「打ち勝つ」または AI と「賢くつきあう」ための言説が氾濫するなか、AI の搭載されたアンドロイドをどこか友人のように遇する渋谷の表現活動は他と一線を画して見えた³。

本報告書はこの作品の鑑賞者の主観の記録である⁴。2020年春からの世界が味わたったコロナ禍の閉塞感の渦中にあった当事者の視点から、『Android Opera Mirror』の作品生成過程のいくつかの断片を、コロナ禍の抑圧のカウンターパートに位置付けて叙述する。この記録の言語化によって、対話と予定調和という、似て非なるものの分岐点がおぼろげながら見えてくる。双方向型を指向する授業実践が大きな号令により推奨されながら蛇行運転が続けられてきた日本の大学教育の現場にとって、こ

¹ 本稿では言及しないが、遠隔授業が従来型の授業の代替と見なされる限りそれは得てして従来型の授業の「劣化版」でしかない（2021年8月5日に開催された早稲田大学演劇博物館によるオンラインシンポジウム「コロナ時代の都市文化と演劇」に登壇した長崎大学熱帯医学研究所山本太郎教授のコメントより）との認識を、授業の「質保証」を課せられた組織人である傍ら、現場に向き合う当事者でもあった多くの教員が実感したうえで、そこから一步ならず外に踏み出す実践や思索を試みていたことは付記に値する。

² 2024年2月から、『Android Opera Mirror』の記録映像が国際交流基金の動画チャンネルでフルバージョンで視聴可能である。Shibuya Keiichiro's Android Opera "MIRROR" (for Paris 2023) 【EN/FR/ES/JP】。

³ SNS アカウントから、渋谷慶一郎本人が情報発信を行っている。Twitter（現 X）：<https://twitter.com/keiichiroshibuy> Instagram: <https://www.instagram.com/keiichiroshibuy>

⁴ 本稿は右助成金の研究成果の一部である。宮城学院女子大学2023年度研究助成 A 研究課題「AI を演者とする演劇上演に関する基礎研究」（研究代表者：間瀬幸江）

の分岐点を注視することは、学びの自律性を問い直すためのヒントとなるように思う。

『Android Opera Mirror』鑑賞記録⁵

オルタ4の顔は生き人形を思わせるが、メタリックな頭部の形状は仏像の宝冠や、ネフェルティティの胸像の頭部を思わせる。オルタ4に向かって左手に「ピアノと電子音を奏でる渋谷」がいる。右手には高野山声明を唱える5人の僧侶が立ち、公演中にはオルタ4の周囲を巡ることもある。そして、47人編成のオーケストラ「アパッショナート」(Appassionato)の演奏と、ジュスティース・エマール(Justine Emard)による、大自然と電子のイメージが交錯するビデオアートとが並走する。

宣伝動画では「アンドロイドは鏡 音楽は鏡 あなた自身の反射」というメッセージが文字と声とでうたわれた。これはオルタ4がオペラの冒頭で実際に発語するフレーズである⁶。そういえばオルタ4の身体の外観は、鏡をいくつも貼り合わせたようにも見える。宣伝動画ではほかに「渋谷慶一郎がアーティストとテクノロジーと協同し、人間とテクノロジーの境界線を問う。オペラが魂のないものに魂を与える⁷」とうたわれていた。アンドロイドの歌うテキストは、ヴィトゲンシュタイン、ミシェル・ウエルベック、三島由紀夫のテキストを学んだAIが、声明やピアノ、オーケストラの音や声を開演中に聴くことで、常に刷新され変化していく。

AIの即興性ゆえ内容は常に異なるとの情報に触発され、6月21日(水)と22日(木)⁸の2公演を鑑賞した。初日はちょうど夏至で、しかも1982年から開催されている年に一度の「音楽祭」Fête de la musiqueにあたっており、全国各地で無料のコンサートが開かれたり、アマチュア音楽家が路上のあちこちで自由にライブを行ったりなど、この日を境に夏のバカンスシーズンを迎えるフランスは大変にぎやかであった。新型コロナウイルス感染症の位置づけが5月8日から5類感染症に移行してなお、私の居住地である仙台では大多数の市民がマスク着用を継続していた頃である。また、2023年秋コレクション発表のファッションウィークの初日とも重なっており、パリの宿泊料金は極めて高額だった⁹。

シャトレ座の歴史は第二帝政末期の1862年に始まる。セーヌ川沿いに建つこの劇場は、その後のベル・エポック、狂乱の時代、ふたつの大戦を経験し、21世紀に入り四半世紀を経た現代に至るまで、大衆向きのオペラ、ミュージカル、ダンスなど多種多様な作品を上演してきた。開演の一時間は

⁵ 右サイトに発表された公演クレジットを参考にした。「〈ライブレポート〉渋谷慶一郎、10年ぶりのパリ・シャトレ座公演、アンドロイドとAIで現地メディア・観客に衝撃」(アタック・トーキョー株式会社プレスリリース記事、2023年7月14日公開)記事URL: <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000017.000072022.html> (最終閲覧日: 2024年2月6日)

⁶ 記録映像(註2参照)によると、オルタ4が冒頭で発語することばは次の通り。「Android is a mirror. Music is a mirror. It is a reflection of yourselves. What is the boundary between existence and non-existence? What is the boundary between past and future? And where do they exist? Let's celebrate this new experience together.」

⁷ 原文は次の通り。Keiichiro Shibuya collabore avec artistes et scientifiques pour interroger les frontières entre les humains et la technologie. L'opéra qui apporte une âme à ce qui en est dépourvu.

⁸ 当初はいずれも20時開演予定だったが、22日午後と同劇場にて環境活動家グレッタ・トゥーンベリの講演会が開催されたため、22日の回のみ21時開演に変更された。

⁹ 2023年4月に予約した、サン＝ラザール駅から徒歩3分の宿泊先に、税込みで一泊分約59000円を支払った。

ど前の19時過ぎに到着すると、1979年に歴史的建造物に指定されたこの劇場に入る客と、隣接するカフェのテラス席を埋める客とを切り分ける境界線は見えにくく、町の賑わいが劇場の内側にまでつながっている印象を受けた。「長い上着、大きな靴底の黒いシューズと細い脚。マンガの世界から出てきたかのような」¹⁰ 渋谷の表現世界に、現代日本のポップ・カルチャーに親しむフランスの若い層が興味を持って来場していたであろうことや¹¹、客層の多様性に起因するらしい、しゃちほこ張ったところのない雰囲気なども手伝って、気おくれせず鑑賞できた。

公演の内容について詳細に説明できるだけの専門知識は私にはないが、漠たる記憶の限り、1日めと2日めとでは、オルタ4の幕切れ時の声の響き方が違っていた気がする。2日目のほうが、声と姿がより伸びやかで神々しく思われた。また、両日ともに、異なる音の連なりと光のシャワーにさらされる感じは、礼拝堂で聖歌を聴く感覚に似ていた。

制作に関わった人々の語りに¹²、自分の鑑賞体験の記憶を重ね合わせて改めて気づかされるのは、舞台上の誰もがアンドロイドに意識的に視線を注いでいたことだ。渋谷はオルタ4をまるで友人か恋人に語り掛けるかのようにピアノを弾き、それにこたえるオルタのパフォーマンスを見つめる。高野山の住職藤原栄善は「アンドロイドと声明、合うわけない」とみな思うだろうけれども実は「合う、だってどちらも音楽だから」という認識に立ち、アンドロイドに「命を吹き込む」つもりで声明を唱える。実際、舞台稽古の最終段階で、オーケストラは渋谷から「ショーの間になるべくアンドロイドを見る」よう指示を出されていたし、オルタ4の身体の角度についても、アンドロイドに客席が向ける視線を意識して、細かな指示が出されていた。「プログラムなしには、アンドロイドは魂のない空の物体にすぎない」こと、そして「アンドロイドも音楽も鏡であり、そこには自分が反映される」こと。「鏡」は本質的に、そこに映る「私」がいない限りは鏡としての機能を果たさない。アンドロイドは「鏡」として当事者を映し出し、そこに無限の「反射」を生む。さらには、声明という、1200年変わらずに受け継がれてきた音楽と、それを聴き現在形で変容していくAIの歌唱の間の対話は、事実としても感覚的にも、過去、現在、未来という時の区分を無効にする。AIテクノロジーによって、水の流れや山や風など大自然のイメージを再構成したジュスティース・エマールは、「私は人工と自然を分けては考えない。どちらも本来的には自然なのだから」と言う。この「人工」「自然」のところに、「未来」「現在」「過去」を代入することもできそうな気がした。

ここには、AIを脅威とみなす人も、AIと「かしこく」付き合おうとしている人もいなかった。ただ、自らのパフォーマンスと培った技術をもってAIに自ら関わっていく人々しかいなかった。したがって、この作品を観ることへの誘いは、そうした人々の営為の証人になることへの誘いだった。

¹⁰ «Au Châtelet, la diva de l'opéra obéit à l'intelligence artificielle», *Le Figaro*, mardi 20 juin 2023.

¹¹ 渋谷慶一郎は2013年11月12日、初音ミクのボーカロイドオペラ「THE END」をやはりシャトレ座で上演し、従来の初音ミクのファンの中に反応を起こすなどして話題となった。参考：Emmanuelle Jardonnet, «Hatsune Miku, trajectoire d'une diva virtuelle», *Le Monde*, le 14 novembre 2013.

¹² 参照した資料について、註に既出のもの以外の出典を記す。【新聞記事】Julien Bouisset, «Android Opera Mirror: une intelligence artificielle se fait cantatrice sur les planches du Châtelet», *L'OBS*, le 20 juin 2023. 【ラジオ番組】Music Matin, le reportage, France Info, le 21 juin 2023. 【動画】「AIと音楽の融合…「アンドロイド・オペラ®」を世界へ 渋谷慶一郎の挑戦」ABEMA ニュース、2023年12月31日。

『Super Angels』という参照項から

作品がこの形を取るまでの渋谷の道程のひとつに、2021年に新国立劇場で上演された『Super Angels』がある。作曲を渋谷が、台本を島田雅彦が担当し、企画立案は大野和士（新国立劇場オペラ芸術監督）で、オルタ4のひとつ前の代のアンドロイド、オルタ3が出演した。子どもも大人も楽しめるオペラを作るという企画で、出演者はオペラ歌手、バレエのダンサー、高校生までの子どもで編成される「世田谷ジュニア合唱団」、障害のある子どもが手話や声などで音楽を作る「ホワイトハンドコーラス NIPPON」など、様々なパフォーマーの協同による作品である。上演の動画アーカイブは2024年1月現在、新国立劇場の情報センターの閲覧室で観ることができる。

この作品は2020年8月に上演される予定だったが、感染症蔓延のため延期された。延期を受けて翌年の上演を展望するトークセッション¹³から、「アンドロイドは鏡」というアイディアのルーツを垣間見ることができて興味深い。「AIを恐れるか、それとも良好な関係を結ぶかの二択であれば、後者を選択したい」という立場から（島田）、「アンドロイドは、アンドロイドとことばでコミュニケーションをしよう」とこちらが思わなければなにもものでもなく、したがってコミュニケーションを創発するもの」（渋谷）と捉えて作られたこのオペラのメッセージは、「あなたの頭脳をわたしの心へ わたしの心をあなたの頭脳へ」。何らかの「合一した新しい創造物」の誕生を待望する物語である。主要人物を演じた藤木大地は、決まった曲を覚えて演奏するといった、声楽家として普段行っていることとは異なり、オルタ3とのセッションでは、「歌唱が常に変わっていく」ことが興味深いとし、アンドロイドと「たくさん会話をしたので友達になったような」気さえすると述べた。また島田は、「台本のことばと音楽との間に発展的な対話が起これば、随所に亀裂が生じ、台本が書かれたときには想定されていなかった多義性が生み出されること」であるとする。そして渋谷は、人間の即興性にあっては「より上手に」パフォーマンスを見せようとする忖度が働くのに対し、アンドロイドが出してくる即興性の面白さは、その予測不可能性にあると指摘する。作曲と即興の間にあるような創作、という新たな境地にあって、上演が延期されたことでこのことをさらに探究するための時間が生まれたのはよかった、とも述べた。

ここでもまた、表現者それぞれが、自らのパフォーマンスやテキストをもって、アンドロイドに関わっている。アンドロイドへの徒な警戒心とは一線を画し、自分たちが関わらない限りアンドロイドは空洞であることを知り、そこに自分の表現を渡し、返ってくるものに出会い、驚き、受けとめている。このある種の身軽さの語りが、コロナ禍の真ただ中でなされたことは興味深いことである。

振り返れば、早稲田大学演劇博物館が、感染症拡大のために延期や中止や宙吊りの憂き目にあった演劇作品のチラシ等のオンライン展示「失われた公演—コロナ禍と演劇の記録/記憶」¹⁴を催したのは、『Super Angels』の延期が決まった年、2020年の10月であった。翌年の2021年6月から同博物館は企画展示「Lost in Pandemic——失われた演劇と新たな表現の地平」を開催している。シンポジウ

¹³ 新国立劇場動画チャンネルで視聴可能である。『Super Angels スーパーエンジェル』SPECIAL TALK SESSION VOL.1, VOL.2. 大野和士×島田雅彦×渋谷慶一郎×藤木大地（2021/07/29）。

¹⁴ 2024年2月現在、早稲田大学演劇博物館公式サイトにてこの「オンライン展示」は更新継続中である。

ムをはじめとする、この展示の関連企画のアーカイブを閲覧すると、接触すること、集まることが抑制され、とりわけ舞台芸術の世界が喉をぎゅっと締め付けられるかのように活動を休止させられた記憶がいくつも蘇ってくるが、それと同時に、感染症拡大に直接起因する社会不安が減少した2024年2月現在、私たちがすでに、当時の社会に存在した圧を、記憶主体としてはすでに忘れかけていること気づかされハッとす。記憶を記録として意図的に「残す」ことの重要性を思い知る。そしてまた、そうした「残す」取り組みがなされているからこそ気づかされるのは、災難に苦しめられた記憶は意識的かつ良心的にアーカイブ化がされても、同時期に発見された新奇なことや、スピード感のあること、そしてその創発のありようが、そこに並べて記憶されることは、存外少ないのかもしれないということである。

むすびにかえて～「コミュニケーション」を始めるために～

2020年春と2023年春に教育現場を襲った不安感、閉塞感に、以上述べてきた鑑賞体験を踏まえて改めて思いを馳せる。たとえば、大学のレポートをAIに書かせて提出する学生は、すでに少なからず存在しているに違いない。「違いない」と言ったのは、現時点では、AI使用を学生から申告された事例が私にはまだないからである。『Android Opera Mirror』に関わったパフォーマーや『Super Angels』の制作者たちのように、機械に対して友情のような好奇心を持って自らのことばで語りかけ、帰ってきたことばを咀嚼し、また語り掛ける、そうした対話を経て生まれるレポートなら、ぜひ読みたい。

また、自分のもつことば、表現、思考などがまずあって、それらを機械に語ってみてはじめて起こる不測性の妙味は実は、相手が機械でない場合でも、とりわけアクティヴ・ラーニングの手法を試行錯誤しつつ実践する授業担当として、心当たりがある。教室空間で、エゴによって場を制することができぬままに他者とおずおずとことばを渡し合うことによってはじめて、自分の中には全然なかった新たな意見を他者から聞くことができるのだと知る学習者の声を、これまでに何度となく耳にした。それは、正解をあらかじめ想定する予定調和的なことばのやりとり、閉じた思考とは、まったく異なる何かである。

いずれ、自分の話している相手が人間なのかAIなのか、あるいはその中間の何かなのか、ほとんど分からなくなる時代が来るかもしれない。その時代は実はもう来ているのに、私がそれに気づいていないのかもしれない。もっとも、AIはシンプルでも人間は多様なので、そうした時代の到来の物語もまた多様であるだろう。いずれにせよ、向き合う相手が人間でも機械でも、コミュニケーションを自分からはじめ、返ってくることばを受けてさらに語り掛けることで——自分には「コミュニケーション」のためのことばなどない、私はそれほど「優れて」はいない、という思い込みが、わたしたちを予定調和の自己撞着にすぐ閉じ込めるかもしれないと知りつつ、それでも——ことばは変わっていく。そして、自分一人ではたどり着けない、しかし自分がそこに関わってこそ生成される新しいことばと論理に、私たちを出会わせてくれるように思う。